

ほたるぶくろ



句集

ほたるぶくろ

布村松景

夏の句

墨付けをきめて大工の五月晴れ

饒舌になりし今宵や初鯉

牡丹散つていつもの寺となりけり

鐘の音に浄土を醸す夕牡丹

神將の忿怒の見栄や牡丹散る

剪り惜しみ牡丹を風に散らしけり

梅雨鴉千体地蔵を掠めけり

都留郡大字忍草梅雨最中

玄翁一喝妖狐昇天雷一閃

せせらぎに河鹿の声を重ねけり

山門をくぐれば浄土朴の花

鬼百合の風に遅れて揺れにけり

夏の蝶阿吽の狛に遊びけり

狛犬さん叫榊の花の降りかかる

村の灯に量のかかりし梅雨入かな

碁石置く音に間のあり梅の雨

碁敵の忘れし傘や額の花し

托鉢の僧の眼光梅雨の雷

人っ子ひとり会はぬ坂道戻り梅雨

緋牡丹を截るや小庭に雨の糸

笹百合を活けて茶の間に風を呼ぶ

角帯を堅めに締めて夏点前

鉄線を活けて古伊賀の破調かな

烏帽子岩に濤の碎けし端午かな

忍者めく黒蝶登る野面積

指先に残る墨の香夕薄暑

ありがたや顎まで浸かる菖蒲の湯

俎板に水走らせて初鯉

屋台の荷絡めて縛り夕薄暑

天道虫
転げて
飛んで
昼下が
り

甚平の胡座の中に子を納め

浴衣着て手足の長くなりけり

相槌を打つてするりと心太

夏帽子小さな顔となりけり

夕顔や格子戸ごしの京言葉

蟻出でてひたすら走る石畳

三伏や壺が火となる窯の中

滝の威の威に三歩退く岩畳

鉄研ぐ鉄の匂ひや雷迫る

夕焼けて切り絵となりし磯根松

遠き灯に星を加えて秋近し

子育ての燕雨切る蔵の町

蚊を打てば雨脚強くなりけり

浴衣着て女の肩となりにつけり

明珍風鈴微かにゆれて暮初むる

空
蟬の
すが
る
榎
や
小
糠
雨

昼寝覚いつしか枕貫ひをり

汗拭ふマル暴刑事の片笑窪

抱卵の鶏の瞬き油照り

手枕に畳目残る溽暑かな

サングラス掛けて話の裏表

地下街に買ふ白い花街薄暑

釘箱に錆の匂ひの溽暑かな

片陰を過ぎて話の途切れけり

一筋の白い道行く日傘かな

鳩の群飛び立つ中の夏帽子

轆轤師に木屑纏る炎暑かな

古物屋に勲章眠る溽暑かな

空蟬や遺骨帰らぬ兵の墓

斑猫の後追ひかけて無言館

裸婦像を遺し一兵敗戦日

遠雷や風に繰られし古語辞典

いにしえの音を土鈴に夜半の夏

思
い
出
を
螢
袋
に
封
じ
け
り

語り合ふ身の上話螢の夜

夕蟬や明日の展開計られず

遠雷に天の裏側光りけり

旅帰り花火の町を素通りに

雷神に不意打くらふ女坂

釣り船の長き水尾に夏惜しむ

夕焼の片隅帰る釣師かな

以下続く